

前回までのあらすじ

《ヒナミ総力戦》の発動から三日後、ツバキ達の住むオオミヤ・シテイは三度目の災禍に見舞われた。大量に現れた《ブレケース》と《ステインガー》の幼体群による蹂躪^{じゅうりん}。

MBデバイスがないツバキだが、居合わせたリツとモカ、そしてキリエの奮戦によって、街からの脱出に成功する。

だが、そんな彼女等の前に、更に絶望的な光景が描き出される。咆哮と共に姿を現した巨大な機獣が、オオミヤ・シテイを破壊していく。それがサクヤヒメによるもので、その内部にやみひめが取り込まれている事など、誰も知らないまま。

オオミヤ・シテイの崩壊から五日目。

帰る場所を失ったツバキ達は、エイミス教の教会に身を寄せていた。

巨大な機獣はオオミヤ・シテイから移動する事もなく、ただ穏やかに時が過ぎていく。それを不気味に感じつつも、今のツバキに出来る事はない。

そんな時、ツバキは担架で運ばれていく見覚えのある少女を目撃する。それは《ヒナミ総力戦》にて、彼女が愛機である《カグツチ》を託した《機獣少女》——アヤカ・シユバイツァーだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

軍隊。

彼女等はそう呼ぶに相応しい集団だった。

個性を捨て突出せず、目的のため全体でひとつの『個』として行動する訓練を受けた〈機獣少女〉達が、統一規格のMBジャケットを纏い、隊列を組み、命令の時をじっと待っていた。

国が違えば、文化や思想も当然ながら違ってくる。

〈機獣少女〉についてもそうだ。その存在が偶像ではなく、タレントとしてアイドル視されているのは東方大陸ならではと言える。例えば中央大陸や西方大陸では、純粋な防人として活動するだけで、装備も実用性に特化した統一規格が採用されている。北方大陸と南方大陸では、やや神聖視される傾向にあるが、それでも煌びやかなMBジャケットで戦場に立つ者はいない。

東方大陸の〈機獣少女〉の在り方は、世界的に見れば明らかに異質なのだ。

それをもっとも強く感じているのが暗黒大陸の住人である。

暗黒大陸では〈機獣少女〉個人の能力を重視しない。むしろ邪魔なものとし、均一化を図る。チームを組ませ、集団戦闘の技能を叩き込む。

装備も同じだ。機力を用いた攻撃手段では能力による個人差が生まれるため、火薬を用いた銃火器が採用されている。MBジャケットもやはり統一されており、動きやすさを優先した。パンツスタイルに、上半身には防弾衣、肘と膝には防具を装着する。東方大陸の住人であれば警察の特殊部隊を彷彿とするだろうが、黒を基調としつつ差し色に緑が使われているため、やや不気味な印象を覚えるかもしれない。

暗黒大陸側は否定しているが、その独自の運用方法から〈機獣少女〉の軍事利用を疑っている国もある。そのため、今こうして中央政府に無断で東方大陸に〈機獣少女〉を派遣している状況は、発覚すれば国際問題となりかねない。

「――」
だが、そんな政治的な心配は現場の人間の領分ではない。自分達は与えられた任務を遂行するだけ――指揮官であるソフィア・ミハイロフはそう教わってきた。

惑星全域に出現した〈ブレケース〉と呼称される敵性体の脅威が収まりつつある最中、東方大陸では〈ステインガー〉に続き巨大な機獣が出現した。それによって中央政府が置かれたオオミヤ・シテイは崩壊し、政治的な窓口が失われたため、暗黒大陸政府は情報収集のため行動を開始した。それが今回の〈機獣少女〉の派遣である。

彼女等の任務はオオミヤ・シテイに現れた機獣の威力偵察。海路で東方大陸に上陸し、現在はオオミヤ・シテイ半径数キロの地点に三つの部隊が展開している。目標の機獣は

口腔内に高出力の荷電粒子砲を装備しているため、これ以上の接近は危険と判断された。

『——ブラボー、配置完了』

『——チャーリー、配置完了』

展開中の二つの分隊の隊長から無線連絡が届く。

「アルファ、了解。作戦開始時刻まで待機されたし」

指示を出し、ソフィアは装備から双眼鏡を取り出す。この距離だと、強化された〈機獣少女〉の視力でも、巨大とはいえ機獣の輪郭を捉えるのがやっとだ。レンズを覗くと、ぼんやりとしていた機獣の詳細がくつきりと浮かび上がる。

全高は約六十メートル。尻尾の先まで含めた全長は百メートルを超すだろう。二本の大きな足で直立し、腕には大木でも握り潰せそうな大きな爪を備えている。

「……」

レンズ越しに見える機獣の巨体に畏怖を覚えた。それは記憶の奥底に刻み込まれた、根源的な畏れのように感じられる。

（あんなものが海を渡って祖国を蹂躪すれば……）

見知った街並みが破壊される光景を想像し、ソフィアは自分達を派遣した暗黒大陸政府の判断を理解した。東方大陸の中央政府と連絡が取れない以上、国際問題だなんだと言っているのは手遅れになるかもしれない。

「……なんだ？」

作戦行動中の私語や、不明瞭な発言は控えなければならない。ソフィアは十名からなるA分隊の隊長であり、本作戦の指揮官でもある。彼女の動揺は部隊の士気に影響を及ぼす。だが、それでも咳かすにはいらなかった。

機獣を中心に、巨大な輪のような物体が浮かび上がっていく。

真円で、指輪のように厚みがあり、中心の機獣のサイズから判断して直径は五十メートルほど。此处からだともるで実感が湧かないが、大きさからして相当な重量があるはずだ。それが重力に逆らって浮き、上昇している。

「なんなんだ……」

双眼鏡を下ろし、ぼかんと見上げる。そのソフィアの様子に気付いた隊員達が、各々の双眼鏡を取り出し、やはり同じような反応をしていく。

『——ブラボーよりアルファ、目標に異常を確認！ 指示を請う！』

『——チャーリーよりアルファ、目標内部に高エネルギー反応！ 指示を——』

フラボー
B分隊からは悲鳴のような声が響き、チャーリー
C分隊からの通信は半ばで途切れ、アルファ
また同じ末路を辿った。降り注いだ光に吞まれ、痛みを感じる暇もなく一瞬で、その存在
は塵へと還った。



窓がない、とある一室。

壁に掛けられた一般家庭用としては大型のテレビ画面に、オオミヤ・シテイを破壊した
巨大な機獣の姿が映されていた。

五日前に突如、中央政府が置かれる議事堂の地下から現れ、周辺を破壊すると眠るよ
うに活動を停止していたのだが、それが再び動き出した。頭部の側面に一つずつある

『目』に相当するであろう部位が点灯し、規則的な点滅を繰り返す。すると、更地と
化した機獣の周囲の地面に亀裂が走り、ゆっくりと何かがせり上がってくる——『輪』
だ。機獣がフラフープとして使用出来そうなサイズのそれは、機獣を中心に潜らせるよう
に上昇し、やがて頭上まで到達すると、機獣は口腔部に装備された荷電粒子砲を真上
に向けて発射した。発射された荷電粒子の奔流は『輪』の中心を通過した直後、三方向
に拡散し、地表に向かって大きく射角を変更した。

わずかに地上に残っていた監視カメラからの映像のため、荷電粒子砲が何を狙ったのか、
目標に命中したのかまでは判らない。だが不思議と、表情のないはずの機獣は満足げに嗤
っているように見えた。

「……今、観てもらったのは一時間くらい前の出来事」

映像を観た一同に向かい言ったのは、(L.C.ファクトリー)のロゼット・コダールだ。
オオミヤ・シテイ崩壊の際、中心部から離れているとはいえ被害は免れず施設は半壊し
たものの、彼女を始めとする所員達はシェルターとしての機能を備えた地下に避難してい
た。

『……………』

間を置いてみたものの、やはり映像に対して発言する者はいない。無理もないだろう。
手があって足がある全高六十メートルの巨大な移動物体に、フラフープとして使えそうな
サイズの輪っかが頭上に付き、それによって光線を拡散させ自由に目標を狙えるようにな
ったのだ。絶望的な気持ちにもなる。

「まさか、こんなものまで地下に眠ってたとはね……」

「探せばもっとヤバいものが見つかるかもしれませんね、所長」

場を繋ぐために発したロゼットの一言に、補佐役であるシオリ・ユウキが真顔で答えた。孤立し自給自足という一種の極限状態であるにも関わらず、茶色のロングヘアは普段と変わらずアップで纏めており、服装の乱れもない。上司に対して辛辣な面もあるが、自分に対しても厳しい、彼女の真面目さが表れている。

「うわあ……。シオリ、今その冗談は笑えないなあ……」

苦笑を浮かべつつ、ロゼットは内心で会話を繋いでくれた部下に感謝した。やはり彼女は有能だ。

「えっと……あの輪っかは何なの？」

ロゼットとシオリが他愛のない会話をする事で、少しは気持ちが落ち着いたのでろう。

彼女等と共に地下に避難していたクラウ・P・ブランが疑問を投げかけた。余談だが、もうメイド服は着ていない。

「こんな事を言うのは技術者として業腹なだけけど……判らない」

ロゼットが肩を落とし、長い金髪が力なく揺れた。

「あれだけの大きさだから、質量だって相当なはず。それを何の支えもなく浮かべるなんて、私達の技術じゃ不可能だよ」

「恐らく〈ステインガー〉と同様の重力制御システムの類が、あの機獣と『輪』には搭載されているでしょう。ですがこれは推測に過ぎず、その理論も失われてしまっている今、実物を解析する以外に検証する術がありません」

シオリも同じ気持ちなのだろう。機獣が兵器として使われていた時代の技術力への敗北感で、忸怩たる思いなのが口調から伝わってくる。

「ただ言えるのは、あの『輪』が偏向レンズとして機能する事。そして、中心を通過した荷電粒子ビームの威力を増幅させている事だね」

「ひょっとして粒子加速器ですか？」

ロゼットの言葉に反応したのは、水色のロングヘアを低い位置で二つ結びにした高校生くらいの少女——「機獣少女」のバナラ・イカルガだ。彼女はオオミヤ・シテイ崩壊の際、装備一式のメンテナンスのためL.C.ファクトリーを訪れており、難を逃れていた。

「理論的には同様だと思います。荷電粒子ビームが『輪』を通過する一瞬、内部を経由して何十、あるいは何百周もする事で加速し、外部に放出されるのでしょうか」

「さすがはバナラ、銃器を扱うだけあるね」

バナラの推測にシオリが同意し、ロゼットは優秀な生徒を褒めるように彼女の頭を撫でた。

「こ、子供扱いしないでください……むう」

文句を言いつつも載せられた手を払う事はせず、バナラはされるがまま撫でられた。その表情を見れば満更でもなさそうなのが伝わってくる。(ヒナミ総力戦で友人のライカ・ユズキが消息不明となり心配していたが、今は思いのほか落ち着いているようだ。

「気になったのだが、あの砲撃は何を狙ったのだ？」

「ワタクシも気になっていました。別のカメラの映像はありませんの？」

微笑ましい光景で、だいぶ緊張が解けると、その場にいた(機獣少女のアイナ・ポーグマンとルイゼ・ルンシユテッドも会話に加わった。口調や雰囲気とは対照的に、小柄で幼い容姿のアイナ。妖艶かつ豊満でありながら気品も併せ持ったルイゼ。どちらも高校三年生なのだが、それぞれ逆の意味でそうは見えない。蒼いショートヘアと紅いロングヘアも相まって、実に対照的な二人である。

彼女等もまた、とある事情で(L.C.ファクトリー)に滞在していた事で被害を免れていた。

「街の外の状況が判るカメラは、把握している限りありません。ですが、あの砲撃が何を目標としていたかの推測は可能です」

シオリの回答に、そうなのかと視線が集まる。

「……恐らく、他国の(機獣少女)です」

しんと静まり返る室内。クラウドとバナラは言葉を失くしていたが、アイナとルイゼはその可能性を考慮していたのだろう。妙な顔つきだが、ショックを受けている様子はない。

「自社サーバーが使えるから、ネット経由で情報収集してるんだけど、そういう動きが暗黒大陸の方であったんだ。あそこは(機獣少女)の運用について少し……いや、かなり特殊だから、災害支援の名目で、勝手に部隊を派遣したっぽいんだよね」

「現在、東方大陸は実質的に無政府状態ですから」

機獣の出現で真つ先に破壊されたのが議事堂だ。真下から現れたのだから当然だが、建物は全壊、生存者がいれば奇跡に近い。

「でね、更に皆のテンションを下げちゃうんだけど……あの『輪』、今も上昇を続けているんだ。このまま衛星軌道に到達したら、惑星全域が荷電粒子砲の攻撃範囲に入る」

「ちなみに現在の上昇速度を維持した場合、二十時間後には衛星軌道に到達します」

そう。映像はあくまで状況説明のための前置きに過ぎず、本題はこちらだった。

「……つまり、あと二十時間以内に機獣が『輪』を破壊しなければならぬ訳か」

「後者は事実上、不可能です。すでに『輪』は高度二百メートルを超えているので」

アイナの出した結論をシオリが訂正した。彼女の言う通り、現在のゼヘナに高高度に位

置する巨大質量物体を破壊する手段は存在しない。飛行型の〈機獣少女〉が、攻撃力の高い別の〈機獣少女〉を運んだとしても、途中で荷電粒子砲に撃ち落とされるのがオチだ。「まあ、『輪』^{リン}だけ破壊しても根本的な解決にはなりませんものね。やはり大元を叩かなくっては」

「そうだな。だが、具体的にどうする？　あまりに時間も戦力も足りない状況だ」

さすがと言うべきか、アイナとルイゼは有事における独自裁量を認められている実力者だけあって、この状況でも落ち着いている。また年頃の少女としては異常だが、今は心強い。

（二十時間後には惑星ゼヘナ全域が機獣の攻撃範囲に入る。まさかそれを材料に取り引きなんてしないだろうし）

目的は単純に、人間に対する攻撃だろう。あの機獣から感じる邪悪な意識——憎悪や敵意は明らかに人間に向けられている。まるで創世神話に語られている文明を破壊した機獣——〈ハメツノマジユウ〉そのものだ。

文献によっては、この星の転換期と呼べる大きな出来事の度^{たび}に、それに類似した機獣の出現が記録されている。時には権力者の野望のため、時には下等な人間は排除すべきという選民思想のため、目覚めては猛威を振ったらしい。状況には例外もあるが、その目的はやはり破壊である。

（……〈ハメツノマジユウ〉か——）

文献を読む限り破壊の権化というイメージを受ける。だが、人間の都合で振り回される機獣もさぞ迷惑だったのではないか——ロゼットは不思議とそんな考えに至っていた。

「——所長？」

シオリに呼ばれ、ハッとする。無意識に現実逃避をしていたのかもしれない。

「なんでもないよ。それより、〈プランE〉の件なんだけど——」

今はとにかく出来る事をやるしかない。そう思い、ロゼットはありつたけの手札を切る事にした。

『輪』^{リン}の衛星軌道到達まで残り約二十時間。

予想到達時刻はゼヘナ暦二〇二六年十月二十七日の正午だった。

第三十九話

現在と過去

惑星ゼヘナ。

其処は人間型の知的生命体と、様々な動物の姿をした金属生命体が共存する星だった。

人間と機獣。両者は使役する側とされる側だったが、それはけして一方的な関係ではなかった。人間は機獣を兵器として利用したが、機獣にとって戦いとは糧である。人間の科学力は機獣を強化し、搭乗者との相性によって更に強い力を発揮した。

それは機獣にとつて、自由と引き換えにするだけの価値があったのだ。

ゼヘナに争いが絶える事はなく、人間と機獣の関係は永劫に続くと思われていた。

しかし——蜜月は終わりを迎えた。

永い眠りから目覚めた一体の機獣によつて。

その機獣は人間と同等以上の自我と知性を持っていた。それがなんらかの影響を与えたのか、ある種の共時性だったのかは判らないが、多くの機獣に明確な自我と知性が芽生え、人間に使役される事に疑問を抱いた。

人間はこれに対し、機械的な処置を施す事で機獣の自我を奪い、多くの機獣がそれに反発した。当然だ、自我を持つものが尊厳を侵されたのだから。

やがて人間と機獣の戦争が始まった。

人間は科学力と戦術を駆使し、それに機獣は数と本能で立ち向かった。

緒戦は拮抗していたが、人間側の機獣は自我を奪われた事で闘争心と生命力が著しく下がり、逆に搭乗者という枷から解放された機獣は人間との戦いで学習し、世代を重ねる事でより種として強くなつていった。捕獲される数が減り、兵器化されても戦闘力が低い人間側の機獣と、野生のまま生まれたままの機獣ではもはや勝負にもならず、戦況は確実に機獣側へ傾いていった。

やがて争いに終止符が打たれようとしていた頃、人間側に希望が生まれた。

アヤカ・シユバイツァーという少女と、彼女が絆を結んだ黒い機獣。互いの憎しみはどちらかが滅びるまで終わらない段階にあったが、彼女等は人間と機獣の間に立ち、和解を呼びかけ続けた。それに触発されるように、少しずつ、だが確実に、争いは沈静化しつつあった。すべての人間が機獣を道具としてしか見ていなかった訳ではなく、また機獣の中にも人間と共に在る事を望んでいるものが少なからず存在したのだ。

だがそれを許さないものがいた。

事の発端となつたと言える機獣だ。

その機獣は人間の殲滅を唱え、従わぬ同族を徹底的に排除し始めた。その所業は常軌を逸し、やがて危機感を抱いた機獣側がこれに反発。人間と機獣は再びその力を合わせ、これに打ち勝った。

創作としてはよくある展開だが、物語は大団円では終われなかった。これで人間と機獣はまた仲良し——となるには、争いの傷痕は大き過ぎたのだ。すでに種として滅亡の危機に瀕していた人間側はトドメを刺されたも同然。人間ほどではなくとも、機獣側もまた多大な被害を受け、共闘を果たした人間の現状に心を痛めた。

なにより、凶行に及んだ機獣を倒しきれていなかった。どれだけ破壊しても再生してしまい、その再生スピードを上回るだけの攻撃手段が存在しなかったのである。

故に封印という手段を選ばざるをえなかった。破壊が無理なら眠らせるしかない。

それがアヤカの選んだ——タッタヒトツノサエタヤリカタ。



陽の光が届かぬ無機質な空間で、サクヤヒメはゆつくりと瞼を開いた。人間も夢を見るらしい。随分と昔の出来事のように錯覚するが、彼女にとってはこの世界で目覚める直前までの出来事であり、体感時間にしてみれば一週間も経っていない。だが、実際にはかなりの年月が経過しているらしく、機獣の力を利用した発電システムや戦闘装備が実用化されている。

おかしな話だ。滅亡寸前まで数を減らしたはずの人間が、こどもも我物顔で繁栄しているとは。しぶとく生き残ったとして、人間の繁殖力では相当な年月をかけなければ、こども数は増えないだろう。

「なにか大きな力が働きでもしたか——」

つまらなそうに独りごちると、掛けていた安楽椅子に軽く身を沈め、頬杖をつく。肩をくすぐる黒髪がさらりと流れ、紅い瞳が物憂げに揺れる。その美貌と妖艶さ、ぞろっとした和服も相まって、今のサクヤヒメの印象は玉座に座る女王そのものだった。

(妾を封印したシステムに組み込まれたというアヤカ・シユバイツァーの姿は、あの戦いから何年も経過しているように見えなかった)

そもそもの状況で、(ステインガー)と呼ばれる機獣だった頃のサクヤヒメを封印する施設を建造するのは不可能だったと思える。仮にそれだけの余力があったとしても、建造中に再生してしまえば、今度こそ人間はおろか、彼女に従わなかった機獣も全滅の憂き目

に遭^あっていたはずだ。

(……ふん、まあよい)

こうして眠りから目覚めたのだ。過去の事など問題ではない。

この人間の姿では火力不足を感じていたが、それも〈ハメツノマジウ〉と〈ハイロウ〉の発見で解消された。

(あと少し。それでなにかも終^{しま}いじや)

終わらせる。

それがサクヤヒメの――〈シュウエンノシヤ〉^なの為すべき事だから。



オオミヤ・シテイを追われたツバキ達が身を寄せていたエイミス教の教会施設に、サクヤヒメとの戦闘で消息不明となっていたアヤカ・シュバイツァーが現れてから数時間後。救護室のベッドで目覚めた彼女が語った過去の出来事は、ツバキの知る歴史とはまるで違うものだった。

「――そうしてあたしは、あなた達が〈ステインガー〉と呼んでいた機獣を封じるために、自らを人身御供にした。それしか方法がなかったのよね」

そう言つて苦笑を浮かべるアヤカ。たかだか十五年しか生きていない少女が、こうも達観した態度をとれるものだろうか。それだけ壮絶な、現在とはまるで違う状況が彼女をそうさせたのであれば、それはひどく理不尽だとツバキは感じた。

アヤカの話信じるなら、彼女は大昔の人間と機獣の戦争に参加し、その中心にいた。最終局面において人間と機獣は手を取り合い、争いの発端^{はつたん}となった〈ステインガー〉と戦い勝利を収めるものの、倒しきれず封印という手段^とを採り、それをアヤカと彼女の愛機である機獣が行^{おこな}った。

それが現在に至り、〈ステインガー〉は封印から解放され、アヤカは封印施設の調査に来たロゼット達によつて発見・保護された。彼女等に現状説明を受けたアヤカは、再び〈ステインガー〉を封印するためにアニスと共にヒナミ・シテイに駆け付けたいらしい。

(そしてアニスさんから指示を受けた私は、シュバイツァーさんに〈カグツチ〉を渡し、彼女はサクヤヒメの姿になった〈ステインガー〉と戦い消息を絶った)

思うところは多々ある。人間と機獣の戦争など記録にはなく、当時の状況から現在までの流れが繋がっているようには思えない。〈ステインガー〉の封印施設など建造^{でき}出来たのか。人間が滅亡寸前だったのなら、今の状況になるまでどれだけの年月を必要としたのか。

ただ、不思議とアヤカの言葉に嘘はないと思えるのだ。
 (彼女が妄想を語っているのでなければ、この矛盾の理由は他に考えられない……)
 世界改変。

過去の出来事が改変され、起きたはずの事件がなかった事にされたり、昨日まで存在しなかった物や現象が発生しているにも関わらず、誰もその変化を認識出来ない。気付けば矛盾が生じ、矛盾は綻びとなり、綻びはやがて世界を破綻させてしまうから。

もつとも、同様の現象が地球で起きていた事を橘アサトから聞いていなければ、そんな発想はツバキにはなかった。むしろ、アヤカからすればこちらの方が妄想狂だろう。

「ロゼットとアニスに聞いて驚いたよ。なんか随分と変わっちゃったみたいだね」

あつけらんとした口調でアヤカは言った。世の中が様変わりし、彼女の知る人間は誰もいないにも関わらず。人身御供となる事を決めた時点で、覚悟は出来ていたのかもしれない。

「シュバイツァーさん……」

「アヤカでいいわよん。あたしもツバキって呼んでいい？」

「あ、はい……」

ポニーテールにしたセミロングの黒髪を揺らし、可愛いというよりは綺麗な顔立ちに、屈託のない笑みを浮かべるアヤカ。圧が強いというより、身の回りにいないタイプで少し戸惑う。

「じゃあ、お近付きの印に——ちよつとハグしてもいいかなっ?! とうか、するー」

「ふえっ?!」

「あ、柔っこい。それに良い匂い……スンスン……ハアハア……うっへへへへへへへへへへ」

「——ぎにゃあああああああああああああああああああああああああああっ?!」

了承を得ぬままアヤカに抱き締められ、始めは単純な驚きだったが、段々とエスカレートしていく彼女の言動にツバキは思わず悲鳴を上げた。



「——はっ。何処かで塔が建った気がするわ……」

だいぶ陽が傾き始めた頃、避難民用の物資のリストをチェックしていた金髪のシスターが、何かヤバ気な電波でも受信したかのように言った。

「お姉様、手が止まっていますよ」

同じようにリストと物資を照合していた、くすんだ赤毛の少女が、何時もの事であるか

のように言った。

マヘリア・メルルとミゼット・レミントン。

MBドライバー・アソシエーション東方大陸支部の待合室ラウンジにて、ツバキが出会ったエイミス教のシスター達だ。当然というべきか、彼女等はツバキに渡した案内に記された教会に配属されており、今の主な仕事はオオミヤ・シテイから来た避難民の対応である。

「あんたも、もっとキリキリ働きなさい。夕食抜きにするわよ」

「ちよつと、誰がキリキリよ!？」

物資の整理作業に駆り出されていたキリエ・ソウマが過剰に反応した。魔女のような格好をしたファフロウ姉妹に付けられた不本意な渾名あだなを思い出してしまったからだが、当然、ミゼットはそんな事情など知るはずもない。

「はあ？ なに怒ってんの?」

「今、キリキリって言ったでしょ!？」

「言ったわよ。だから、なんで怒ってんのよって聞いてんの」

すでに作業に戻っていたマヘリアは、その様子を微笑ほほえましく眺ながめていた。



「……はあ。堪能たんのうさせてもらったわ」

ツバキを抱き締め——というより抱きつき、匂においを嗅かぎ、胸うすに顔を埋めて頬擦りほおずしたりと、暴虐ぼうぎやくの限りを尽くしたアヤカは満足げに言った。対照的に、彼女から解放され、ぐったりとしたツバキは、乱暴された乙女ていの様相を呈ていしていた。

ヒナミ・シテイの式場で初めて会った時から可愛いと感じていた。単純な容姿ようさもだが、年齢の幼さとは不釣り合いな落ち着いた性格との差異ギャップが堪たまらない。

その上——魅惑のロリ巨乳である。着痩せしているのは服の上からでも気付いていたが、実際に触れてみて、そのボリュームは我を失いそうになったほどだ。

女に生まれた事を女神エイミスに感謝したい。男だったら通報待ったなしである。

「……………汚よごされた気分です」

まるで不審者を見るような表情を向けるツバキ。これはこれでアヤカにとっては褒美ほうびである。

「責任取るわよ!」

「結構です近付かないでください人を呼びますよ」

どうやら警戒されてしまったらしい。多分に自業自得だが。

「まあまあ、冗談はこのくらいにして」

「……冗談であんな事をされたのだとしたら軽蔑します」

はぐらかそうとするアヤカに対し、ジトツとした目でツバキは言った。おとなしく控えめな性格だと思っていたが、わりと辛辣な事も言うらしい。やはりアヤカの自業自得ではあるが。

「あー、うん……………ごめんね?」

さすがに会ったばかりで無遠慮だったと反省し、アヤカが表情を改めて謝罪すると、ツバキは嘆息しつつも機嫌を直してくれた。

「……その、訊きたい事は色々ありますが——」

「判ってる。相棒の事よね」

ずっと気になっていたであろう事は、アヤカもツバキと話していて気付いていた。それでも、話の腰を折ってしまうと思い、切り出せずにいたのだろう。

服の内側から本体を取り出し、首にかけていた赤い紐を外す。

「ありがとう、大事な相棒を預けてくれて」

黒い勾玉——待機状態のMBデバイスを、今あるべき少女の元に返す。

過去の相棒であるアヤカから、現在の相棒であるツバキに。

「カグツチ……………」

受け取った相棒を愛おしそうに見つめるツバキ。その様子を見て、アヤカは一抹の寂しさと同時に、違和感を覚えた。

「……あれ? あたしは〈機獣少女システム〉なんて知らない——」

アヤカが知っているのは機獣そのものだった愛機で、当時は〈機獣少女〉など存在しなかった。

（なのに、なんで使い方を知ってたの? ううん。そもそも、なんで今まで疑問にすら思わなかったの……………）

知らないはずの事を知っていた——というより、知っているのに、その事実を忘れていたような感覚。まるで『機獣少女だった自分が、なかった事にされてしまった』ような。

（それでも無意識に憶えていて、だから疑問も抱かず使いこなせると思い込んだの……………?）

気付いてしまった違和感に、アヤカが薄ら寒いものを感じていると——

「カグツチ?」 どうして答えてくれないんです……………」

戻ってきた愛機が口を利かない事にツバキが戸惑っていた。

「ずっとそうなの。気付いたのはあなたと別れてからんだけど、MBジャケットを展開

してからずっと、何も言わなくなってる」

MBデバイスとしての機能は正常に働いているため、気付くのが遅れた。

今思えばだが、想定した出力が出ないと感じたのもおかしい。MBデバイスとしては初めて使うのだから、比較対象などないはずなのだ。

「そうなんですね……実は以前にも一度、同じような事があつたんです。だからきつと今回も——」

最後まで言いきらず濁すあたり、確信というより希望的観測によるところが大きいのが伝わってくる。それでいて都合のいい奇跡など信じていない。見た目は幼いが、ツバキには年齢相応の子供らしさがまるで感じられない。

「……ごめんね。あたしは大丈夫なんて言っただけであげられない。だって何の根拠もないのに無責任でしょ?」

無責任でもなんでも、ただ肯定してほしい人もいる。だが、ツバキは違ふと思った。

「だからこれは、ただのワガママ——」

ツバキの背中にゆつくりと、逃げようと思えばいくらでも逃げられるような動きで、そつと両手を回す。先ほどとは違い、母が子にするよう優しく抱き寄せる。

「そんな顔しないで。女の子がっつらそうにしているとね、あたし、ひどく悲しくなるの」

ツバキは逃げず、抵抗もしない。邪な気持ちはないと判断したのだろう。正直、ゼロではないのだが、ここは出さないよう努力しよう。

「カグツチ」って名前、ツバキが付けたの?」

「あ、いえ……カグツチ」には過去の記憶がなくて、それでも印象に残っていた単語がそれだったんです」

憶えない単語だ。という事は、アヤカが出会う以前の『なにか』だろう。

「アヤカさんはカグツチ」の事を何か知っているんですか?」

抱き締められた格好のまま、今度はツバキから質問が来た。その姿があまりに無防備なため、ついつい煩惱が首を擡げてくるが、なんとか理性で抑える。

「もちろん知ってるわよ。だって、あたしの相棒でもあつたんだもの」

人間と機獣の戦争中に、敵であるはずの人間側につき、アヤカと共に争いを終わらせるため戦ってくれた機獣。カグツチ」にはその機獣のコアの欠片が納められている。だからアヤカは契約者でなければ起動出来ないはずの他人のMBデバイスを使った。その存在を感じ取る事さえ出来ただけだ。

「えっ……じゃあアヤカさんはカグツチ」の過去を知っているんじゃない?」

「うん。でも、『カグツチ』って単語に心当たりはないのよね。あの子は特殊な機獣で、あ

たしが会おうずつと昔から生きてるらしいの」

「特殊な機獣……」

口調から察するに、ツバキには心当たりがあるようだ。

「名前も出会った時にはあったわ。あ、さすがに人間の言葉は話せないわよ？ でも、心を通わせられるようになるよね、言葉を交わせるようになるの」

『想刻の間』と呼ばれる、機獣の記憶装置内に形成される仮想空間での対話。其処では機獣が人の姿となって現れる。

「——〈ヤミヒメ〉」

『想刻の間』で会った『彼女』はそう名乗った。

「やみ、ひめ……?」

「そう。それが〈カグツチ〉の本当の名前よ」

機獣の名前としては変わっている部類だろう。だが、ツバキの反応は意外とか驚きとは違つように感じられた。



コックピット
操縦席。

その居住空間と呼ぶには狭い密室で、二人の男女が身を寄せ合っていた。夜は冷えるからという理由だが、ひとつの座席で同じ毛布に包まって眠る様子は、仲睦まじい恋人同士のようなものである。

「……ん——」

女性の方が囁くように吐息を漏らした。また少女と呼べる年齢だが、その官能的な声々と、相手に向ける表情はすでに『女』のそれだ。

「……………」

男性の方もまだ少年で、こういう状況に慣れていない様子がありありと伝わってくる。

「……カナコ、押し付けるな、もぞもぞするな」

「兄さん、どうして何もしてくれないんですか?」

「するか。後ろに紅桜もいるんだぞ」

「誰もいなければいいんですね！ 紅桜、ちょっと席を外して。二時間くらい」

「なんかやけにリアルな数字だな……」

「データによると、ラブホテルの平均的な休憩時間ですね」

後方の複座から淡々とした少女の声が聞こえた。彼女が『紅桜』^{べにお}だろう。

『——もう！ 全部聞こえてるんだからね……!?!』

操縦席内のあらゆる画面^{モニター}に小学生くらいの少女の姿が同時に映る。記録された映像ではなく、まるで画面の中に実際にいるかのように、長い黒髪をポニーテールにした獣耳^{ケモノミミ}の少女は彼等を睨^{にら}んでいる。正確には怒っているというよりヤキモチを焼いているようだ。

「あー、やみ子。判ったから怒鳴るな……」

『早く寝て！ 間に合わなくなっちゃうでしょ!?!』

「そうね。早く寝ましょう、兄さん」

『あと、カナコはアサトからはーなーれーてー……ッ!!』

少女が気怠^{けだる}げな少年に甘えるように身を寄せると、獣耳の少女は顔を真っ赤にして画面の奥から叫んだ。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙るとおあさです。

『ゾイヤミ』第二十九話をお届け致します。

最初に謝っておくと、ゼーナで起きた世界改変がややこしくなっています。あとがきで解説するのは反則な気もしますが、今回の話に登場した人間と機獣の戦争が終わり、世界改変が起きてツバキ達の知る世界線に移行するのですが、その間にも世界改変が起きています。これまで断片的に書いているアヤカが〈始まりの機獣少女〉となる世界線が、それによってなかった事にされています。

これはもう完全に、〈機獣少女〉として戦った過去と、今回の機獣の搭乗者だった過去の矛盾を、強引に解決した結果です。

開き直ります——ややこしくなっごめんなさい。

言い訳しかしていませんが謝辞を。

まずは今回もチェックをしていただいている紙白さんに感謝を。まだまだ娘さん達には活躍の場があります。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。〈ヒナミ総力戦〉がクライマックスだと思われた方もいるかと思いますが、次の展開がそうです。さすがにもう終わらせません。もうちよつとだけ付き合ってください……！

あ、久々にツバキのロリ巨乳いじりが出来て満足です。

2019 / 10 / 28 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る